

中学校国語科における習得と活用のつながりを意識した授業づくり —活用場面を設定した単元構想と2種類の習得と活用を通して—

田辺市立高雄中学校
教諭 有本 佐智

【要旨】

本研究では、中学校国語科における習得と活用のつながりを意識した授業づくりの手立てとして、「単元を通して課題解決をめざす言語活動」をもとにした単元構想と2種類の習得と活用を取り入れた授業づくりを提案する。具体的には、富山・杉本（2015）の「単元を通して課題解決をめざす言語活動」をもとに、「教科書教材における習得と活用」、「教科書教材における習得と単元末における他教材を用いた活用」の2種類の習得と活用を取り入れた単元構想を行い、どのように授業をつくれれば良いか、その手順を整理した。習得と活用を意識して繰り返すことで、生徒に付けたい力が定着し、様々な場面で身に付けた力を活用することができるようになった。

【キーワード】

習得と活用、単元構想、付けたい力、言語活動、学習活動の精選

1 研究のねらい

筆者はこれまで漠然と、生徒が授業で習得したことを他の場面で十分に活用できていないと感じていた。そこで所属校の生徒の実態を具体的に把握するため、平成27、28年度全国学力・学習状況調査（以下、全国学調と略記）の結果を分析してみると、提示された複数の資料を活用して考える問題や、資料から読み取ったことをもとに条件に従って文章を書く問題等に課題が見られることが分かった。これらは、基礎的・基本的な知識・技能を場面に応じて組み合わせることで解決する問題、つまり活用する力を問う問題である。こうした問題に課題が見られる要因として、既習事項の定着が十分にできていないことや、それを活用する力が育まれていないことが考えられる。

現行の学習指導要領では、基礎的・基本的な知識・技能を活用して課題を探究することのできる国語の能力を身に付けるために、様々な言語活動を工夫し、その充実を図っていくことが重要であるとしている。しかし筆者のこれまでの授業は、知識の伝達が中心であり、習得したことを活用させる場面の設定や付けたい力を身に付けさせる適切な言語活動の設定ができておらず、単元構想を行う段階に課題があると考えた。

平成28年の中央教育審議会における「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」によると、次期学習指導要領改訂では、「教科等相互あるいは学校段階相互の関係をつなぐことで、教科等における学習の成果を、『何を知っているか』にとどまらず『何ができるようになるか』にまで発展させることを目指す」（※1）としており、ここでも身に付けた力を活用することが求められている。これらのことから、本研究では、筆者の授業における課題の解決に向けて、「習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた『見方・考え方』を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう『深い学び』が実現できているか。」（※2）という視点を加味し、授業改善を行いたいと考える。そして、生徒に授業で習得したことを他の場面で活用することができる力を育むため、習得と活用のつながりを意識することと、次期学習指導要領改訂でも引き続き重視されている言語活動の充実を目指すことを主題とし、授業づくりに取り組むこととする。

2 研究の方法

基礎的・基本的な知識・技能を活用して課題を探究することのできる国語の能力を身に付けさせるためには、上記で述べたように、言語活動の充実を、単元を通して考えることが重要となってくる。そこで、富山・杉本（2015）の「単元を通して課題解決をめざす言語活動」をもとに、単元構想を行う。「単元を通して課題解決をめざす言語活動」とは、単元の冒頭から終末に至るまで、どのような課題を解決するために学習するかを明確にする活動（※3）のことである。この言語活動を考える際には、習得と活用のつながりを意識し、授業づくりを行うこととする。具体的な方法として、習得と活用のつながりにおいて、2種類の習得と活用を取り入れ、授業づくりの際の手順をまとめる。

（1）2種類の習得と活用

富山・杉本（2015）の「知識・技能の習得や定着は、それを使うことによって促される」（※4）という考えを踏まえ、単元構想を行う際には2種類の習得と活用を取り入れる（図1）。

2種類の習得と活用とは、教科書教材における習得と活用（白矢印）と、教科書教材における習得と他教材における活用（黒矢印）を指す。まず、教科書教材における習得と活用（白矢印）とは、教科書教材で習得したことを同一時間内やその教材を用いる別の時間で活用することを指す。次に、教科書教材における習得と他教材における活用（黒矢印）とは、教科書教材で習得したことを、単元末に他教材を用いて活用することを指す。

この2種類の習得と活用を取り入れることで、他教材を用い、授業で習得したことを他の場面で活用することができるという実感を生徒にもたせ、身に付けた力を活用する機会を増やし、習得したことを確実に定着させることを目指す。

この2種類の習得と活用を取り入れることで、他教材を用い、授業で習得したことを他の場面で活用することができるという実感を生徒にもたせ、身に付けた力を活用する機会を増やし、習得したことを確実に定着させることを目指す。

（2）授業づくりの手順

上記の「単元を通して課題解決をめざす言語活動」をもとに、2種類の習得と活用を取り入れた単元構想を行い、Ⅰ～Ⅲの段階に分けて、授業づくりの手順をまとめる（表1）。

○Ⅰ段階

授業づくりを行うときには、まず「生徒の実態の把握」と「年間指導計画の作成」を行う。

「生徒の実態の把握」とは、前年度における既習事項の定着具合や、今年度における前単元までの既習事項の定着具合といった生徒の学習状況、日頃の様子や他の授業での様子といった生徒の生活状況を把握することを指す。そうすることで、生徒の課題を踏まえた授業づくりを行うことができる。

また、「年間指導計画の作成」とは、学習指導要領の指導事項を把握し、各単元で重点的に指導することを定めながら、年間を通してバランスよく計画することであり、各単元の指導時数の目安を満たし、適切な時期に計画することを指す。そうすることで、1年間を通し指導事項を効果的に指導することができる。

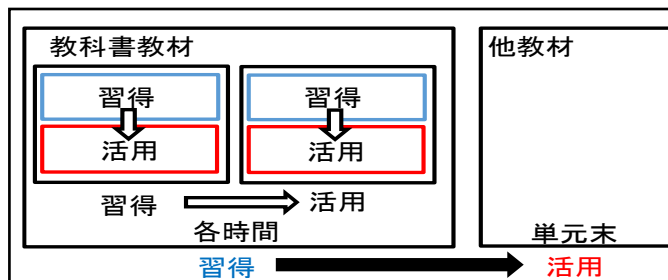


図1 2種類の習得と活用の単元構想モデル

表1 授業づくりの手順

Ⅰ段階	生徒の実態の把握	
	年間指導計画の作成	
教材研究		
Ⅱ段階	(i)単元全体の構想	単元を通して付けたい力の決定
		単元を通して行う言語活動の内容の選定 ※2種類の習得と活用
		単元を通じた評価規準の設定
	(ii)各時間の構想	各時間における付けたい力の決定
		各時間における主たる学習活動の選定 ※2種類の習得と活用
		各時間における評価規準の設定
(iii)本時の構想	本時の学習活動の精選	
授業実践		
Ⅲ段階	評価・授業の省察	

○Ⅱ段階

具体的に、ある単元について授業の構想を行う際には、(i) 単元全体の構想、(ii) 各時間の構想、(iii) 本時の構想の3つの段階で考える。

(i) 単元全体の構想

ここでは単元全体を構想する。具体的には、「単元を通して付けたい力の決定」、「単元を通して行う言語活動の内容を選定」、「単元を通じた評価規準の設定」を行う。

まず「単元を通して付けたい力の決定」とは、学習指導要領の指導事項を確認し、教科書の単元目標及び学習目標と単元末の学習の手引きを把握し、これらをもとに付けたい力を決定することである。

次に「単元を通して行う言語活動の内容を選定」とは、付けたい力に合わせ言語活動の内容を選定することである。その際には、生徒の実態の把握から見えた課題克服につながる場面について考えることが大切である。このとき、上記(1)で述べた「2種類の習得と活用」を取り入れ、単元末の活用場面に用いる他教材を選定する。

最後に「単元を通じた評価規準の設定」とは、「評価規準に盛り込むべき事項（「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料）」を参考に、言語活動を通して付けたい力が身に付いたかを適切に評価する規準を設定することである。

(ii) 各時間の構想

ここでは(i)で構想したことを指導時数に合わせて分け、(i)と同様の流れで各時間を構想する。具体的には、「各時間における付けたい力の決定」、「各時間における主たる学習活動の選定」、「各時間における評価規準の設定」を行う。

まず「各時間における付けたい力の決定」とは、どのような力を積み上げれば単元を通して付けたい力が育めるかを考え、各時間における付けたい力を決定することである。

次に「各時間における主たる学習活動の選定」とは、各時間における付けたい力に合わせ、それぞれの時間に行う主たる学習活動を選定することである。その際には、主たる学習活動が単元を通して行う言語活動につながるように考えることが大切である。ここでも「2種類の習得と活用」を取り入れ、選定した主たる学習活動に合わせた、習得の場面と活用の場面を構想する。

最後に「各時間における評価規準の設定」とは、(i)で設定した評価規準にもとづき、各時間の学習活動を通して付けたい力が身に付いたかを適切に評価するための評価規準を設定し、それに合った評価方法及び評価基準(A・B・C)を設定することである。

(iii) 本時の構想

ここでは、(i)(ii)で構想したことを、1時間の授業を構想するにあたり、「本時の学習活動の精選」を行う。「本時の学習活動の精選」とは、本時の構想の際に、学習活動が付けたい力を付けるための活動として適切なものであるか、発問や板書に無駄がないか、時間内に収まるか等を考え、精選することである。ここで、時間内に計画した学習活動が収まらないことが考えられるときには、学習活動が本時の付けたい力に関連しているかどうかを判断基準に、精選を行う。

○Ⅲ段階

授業実践後には、「評価・授業の省察」を行う。

「評価」とは、生徒の各時間の評価と単元末の評価を総合し、付けたい力が身に付いたかどうかを評価規準にもとづき評価することを指し、「授業の省察」とは、生徒の評価をもとに、付けたい力を身に付けることができる授業となっていたかを省察することを指す。そうすることで、その単元での生徒の学習状況が把握でき、以降の授業づくりの際、生徒の実態の把握につながる情報を得ることができる。また、授業の省察から得た改善点を次単元の授業づくりに生かすことができる。

以上の「単元を通して課題解決をめざす言語活動」をもとにした単元構想と2種類の習得と活用を踏まえ、まとめた授業づくりの手順を用い、所属校において授業研究を行った。

3 所属校における授業研究

所属校の第2学年4学級を対象に10月に「字のない葉書」(表2)、11月に「君は『最後の晩餐』を知っているか」(表3)(光村図書「国語2」)を題材に授業を行った。授業を行う際には、上記の「単元を通して課題解決をめざす言語活動」をもとにした単元構想に2種類の習得と活用を取り入れ、授業づくりを行った。

(1) 10月実施「字のない葉書」について

表2 10月実施「字のない葉書」単元構想

学習目標	◎人物の言動の意味を考え、人柄や心情を捉える。(読イ) ・父親に対する「私」の思いを捉え、自分の考えをもつ。(読ウ)	
付けたい力	◎言動を描いた表現に着目し、人柄や心情を捉える力。 ・登場人物に対する筆者の思いに対し、自分の考えを述べる力。	
言語活動	「向田邦子の随筆を紹介する。」 ・記述があるときとないときを比較し、その効果について考える。 ・作品から読み取ったことを根拠に自分の考えを書く。	
時	学習活動 ※は図2と対応	評価規準
1	前半部を用い、「登場人物の言動やエピソードと人柄・心情を結び付けて読む」方法を学ぶ。(※習得①) 後半部を用い、「登場人物の言動やエピソードから、人柄・心情を読み取る」活動を行う。(※活用①)	エピソードや登場人物の言動をもとに、人柄や心情を読み取ることができる。
2	「作品の前半部の表現やエピソードの効果について考える」方法を学ぶ。(※習得②) 「作品の最後の段落の表現やエピソードの効果について考え、筆者の思いを読み取る」活動を行う。(※活用②)	エピソードや表現の仕方を根拠に、父親に対する「私」の思いに対して考えをもつことができる。
3	教科書教材で習得した力を用いて、向田邦子の他作品を紹介する。(※活用①・②)	エピソードや表現の用い方に着目し、随筆を読み、紹介する文章を書くことができる。

図1の2種類の習得と活用の単元構想モデルをもとに「字のない葉書」に合わせて習得と活用を図2のように設定した。習得したことを同一時間内で活用することで、付けたい力の確実な定着を図り、単元末には、それまでの時間で習得したことを組み合わせて活用する言語活動を行うこととした。

しかし実際に授業を行ってみると、「字のない葉書」の授業では、予定していた学習活動を標準時間である3時間では終えることができなかった。これは、授業づくりの手順の、Ⅱ段階(i)の単元を通して行う言語活動の内容の選定の際に、単元末に用いた他教材の内容が難しく、読む量も多かったことや、(iii)の本時の活動の精選が十分にできていなかったこと、そして(i)(ii)の2種類の習得と活用において、付けたい力の習得が不十分なまま活用を行ったことが要因であると考えられる。

(2) 11月実施「君は『最後の晩餐』を知っているか」について

10月実施の「字のない葉書」の授業での反省を生かし、「君は『最後の晩餐』を知っているか」の授業の単元構想(表3)を行った。

まず、(i)の単元を通して行う言語活動の内容の選定に関しては、他教材に既習教材を用いることで、教科書教材で習得したことを活用させることに集中させた。さらに他教材に対する抵抗感を和らげ、内容の理解を深めるため、あらかじめ朝読書の時間に他教材を読ませた。また(iii)の本時の学習活動の精選に関しては、標準時間に収めるためにより一層の精選を行う必要性を感じた。そこで、付けたい力に迫る学習活動を吟味するため、

◎は重点的に指導する学習目標

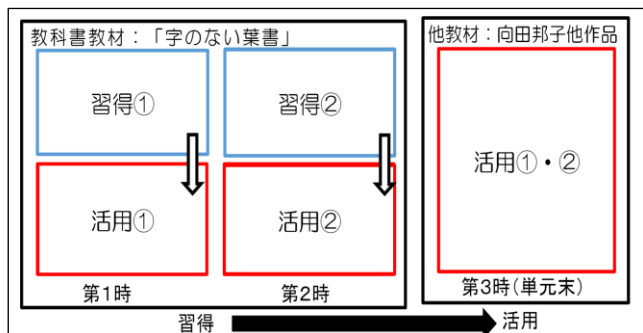


図2 「字のない葉書」の習得と活用の構想図

予想される生徒の発言や記述を具体的にイメージした。その結果、付けたい力に関連して
いない学習活動が浮き彫りになり、学習活動を必要なものだけに絞ることができた。

表3 11月実施「君は『最後の晚餐』を知っているか」単元構想

学習目標	◎語句や表現の工夫に着目して、筆者のものの見方や考え方を読み取る。(読ウ) ・筆者の絵画の見方について、自分の知識や体験と関連づけて考えをまとめる。 (読エ)	
付けたい力	◎表現に着目し、筆者のものの見方や考え方を捉える力。 ・筆者のものの見方や考え方に対し、自分の考えを知識や体験と関連付けてまとめる力。	
言語活動	「筆者のものの見方や考え方について自分の考えをまとめる。」 ・作品から読み取ったことを根拠に、条件に従って自分の考えを書く	
時	学習活動 ※は図3と対応	評価規準
1	序論を用い、「筆者の絵画の見方や考え方を読み取る」方法を学ぶ。(※習得①)	筆者の「最後の晚餐」に対する見方や考え方を読み取ることができる。
2	本論を用い、「筆者の絵画の見方や考え方についてまとめる」活動を行う。(※活用①)	筆者の「最後の晚餐」に対する見方や考え方を読み取り、具体的にまとめることができる。
3	結論を用い、「筆者の絵画の見方や考え方についてまとめる」活動を行う。(※活用①) 作品を通して読み取った「筆者の絵画の見方や考え方について、自分の考えを、根拠を明らかにしてまとめる」方法を学ぶ。(※習得②)	筆者の絵画の見方や考え方について、自分の考えを、根拠を明らかにして述べるができる。
4	教科書教材で習得した力を用いて、既習教材「『鳥獣戯画』を読む」を読み、筆者のものの見方や考え方について自分の考えをまとめる。(※活用①・②)	筆者のものの見方や考え方を読み取り、自分の考えを、根拠を明らかにしてまとめることができる。

そして (i) (ii) の2種類の習得と活用については、付けたい力を確実に習得させてから活用させる必要を感じたため、図3のように、習得の時間を十分に取り、同一時間内ではなく、単元内の別の時間に活用場面を設定することにした。

以上のように、10月に実施した授業での反省を生かして単元構想を改善したことで、標準時間内に学習活動を終えることができた。また生徒の反応から、満足度の高い授業を行うことができたと考える。

◎は重点的に指導する学習目標

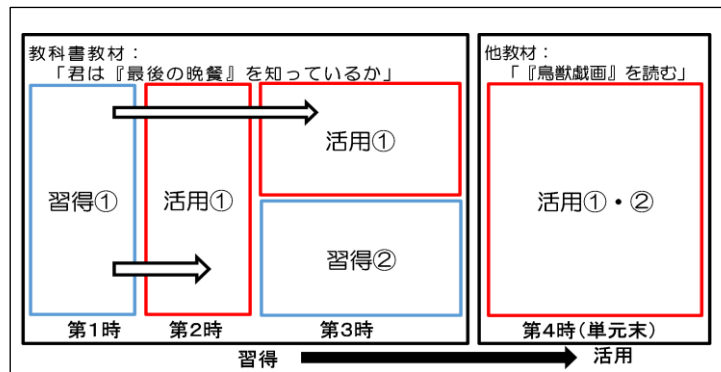


図3 「君は『最後の晚餐』を知っているか」の習得と活用の構想図

4 成果と課題

習得・活用のつながりを意識した授業づくりの成果と課題について、2つの提案授業における生徒の成果物の評価(図4、図5)や授業者の見取りから述べる。

(1) 成果物の評価について

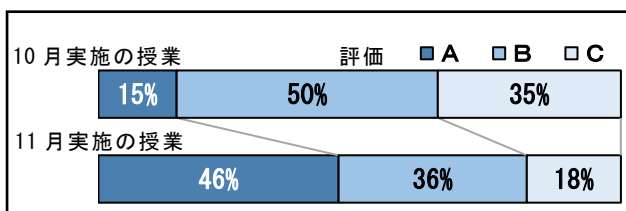


図4 10月と11月に行った授業の単元末の成果物の評価

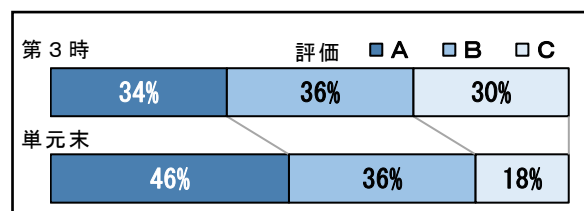


図5 11月に行った授業の単元内の成果物の評価

表 4 各教材における学習活動とその評価基準

教材名	時	学習活動	評価基準
「字のない葉書」	第3時	向田邦子の随筆（「お辞儀」「子供たちの夜」）を紹介する文章を書く。	①登場人物の言動から、人柄や心情を読み取っているか。 ②表現やエピソードから、登場人物に対する「私」の思いを読み取っているか。 (A：両方を満たすもの B：①を満たすもの C：それ以外)
「君は『最後の晚餐』を知っているか」	第3時	「君は『最後の晚餐』を知っているか」に描かれた筆者の絵画の見方や考え方について、自分の考えを、根拠を明らかにし、知識や体験と関連付けてまとめる。	①筆者の考えを捉えているか。 ②筆者の考えに対する自分の考えが書けているか。 ③その理由が書けているか。 ④自分の知識・体験と関連付けているか。 (A：全てを満たすもの B：①②③を満たすもの C：それ以外)
	単元末	『鳥獣戯画』を読む」に描かれた筆者の絵画の見方や考え方について、自分の考えを、根拠を明らかにし、知識や体験と関連付けてまとめる。	

生徒の変容を成果物の評価から分析する。10月と11月に行った授業の単元末の成果物を表4の評価基準に従ってそれぞれ評価すると、図4の結果となり、10月の授業より11月の授業の方がA評価となる成果物の割合が増加していることが分かる。また11月に行った授業において、教科書教材を用いた第3時の成果物と他教材を用いた単元末の成果物の評価を比較すると、図5のような結果となり、習得として扱った第3時の成果物よりも、活用として扱った単元末の成果物の評価の方が、A評価となる割合が増加していることが分かる。

(2) 成果と課題

ア 成果

図4でA評価となる成果物の割合が増加したのは、10月の授業の反省を受け、「単元を通して課題解決をめざす言語活動」をもとにした単元構想と2種類の習得と活用の再構想を行ったことで、学習活動の精選や付けたい力の確実な習得とそれを活用する場面の適切な設定につながったためだと考えられる。図5で同じ単元内の成果物の評価が上がったのは、第3時と単元末で同じ活動を繰り返し行うことで、付けたい力の定着が図られたためだと考えられる。10月の授業では、教科書教材において習得させたそれぞれの力を、他教材において組み合わせ活用させたが、11月の授業では、教科書教材において習得させたそれぞれの力を組み合わせ活用させ、他教材において同じ活用を繰り返させた。このように、単元末まで見通した活動を設定することで、生徒は単元末の活用に対してより意欲的に取り組むことができたと考えられる。以上の結果から、習得した力を繰り返し使うことや、習得した力と力の組み合わせ方を身に付けることで、付けたい力の確実な定着や身に付けた力の場面に応じた活用につながることを実感することができた。また、単元末に他教材を用いた活用場面を設定した単元構想を行うことで、「物語を読むときにも、登場人物の言動や心情を読み取ることで、分かりやすくなるんだと思った。」や「好きな本をおすすめするときも、表現の特徴や工夫を言えば、その良さが分かると思った。」といった感想が生徒から見られ、授業で身に付けた力を他の場面でも活用しようとする姿がうかがえた。

習得と活用を意識した授業づくりに取り組むことで、言語活動を付けたい力を身に付けさせるための手段とした授業構想を行えるようになり、身に付けた力を活用させる言語活動の場面を意図的に設定できるようになった。また、言語活動において、全国学調から得た生徒の課題を踏まえた場面設定を行うことで、付けたい力だけでなく、生徒の課題を克服する力を育む機会を設けることができた。さらに、「単元を通して課題解決をめざす言語活動」をもとに、2種類の習得と活用を取り入れた単元構想を行い、授業づくりの手順を

まとめることで、本研究における筆者の考えを整理することができ、増加している若手教員にも利用してもらえものを提示できたのではないかと考える。（表1参照）

イ 課題と今後に向けて

本研究において、教科書教材の学習時間に他教材を用いた活用の時間を加えた上で、標準時間内に収めることに難しさを感じた。これは、教科書の学習内容の系統性を押さえることができおらず、学習活動の精選が十分でなかったことが要因として挙げられる。系統性を押さえ、学習活動の精選を図るためには、まず、年間指導計画の作成を重視する必要がある。各学年の系統性を知り、どの単元でどの学習内容を重点的に指導するのかということを決める。そして、実際の授業では、設定した学習内容や、これまでの学習と照らし合わせながら、より一層の学習活動の精選を行いたいと考える。

また、付きたい力の習得を大切に、基礎・基本を徹底させるためにも、習得と活用のバランスを考える必要がある。このとき、同一単元の中で習得したことを活用するだけでなく、学習目標の系統性を踏まえ、習得に重点を置く単元と活用に重点を置く単元という風に、単元と単元で習得と活用のつながりを考えることで、習得の時間を十分に取、基礎・基本を徹底することができると思う。

また評価に関して、本研究では教科書に2つ設定されている学習目標のうち、重点的に取り扱う学習目標のみに応じた評価規準を設定し、生徒の成果物の評価を行った。しかし、評価を適切に行うためには、設定された2つの学習目標それぞれに応じた評価規準を定める必要がある。評価規準や評価方法に関しては、これからも研究を深めていきたい。

そして、今後は国語科における習得と活用だけではなく、国語科と他教科、国語科と生活場面をつなげ、螺旋的・反復的に学ばせていきたいと考えている。

<引用文献>

- ※1 文部科学省「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」 p.46（2016）
- ※2 上掲書 p.50（2016）
- ※3 富山哲也・杉本直美「中学校国語科 単元を通して課題解決をめざす 言語活動プラン15」東洋館出版社 p.6（2015）
- ※4 上掲書 p.1（2015）

<参考文献>

- ・大熊徹『中学校国語科【活用型】学習の授業モデル』明治図書出版株式会社（2009）
- ・田中宏幸・大滝一登『中学校・高等学校 言語活動を軸とした国語授業の改革 10のキーワード』三省堂（2012）
- ・富山哲也『<単元構想表>でつくる！中学校国語科授業 START BOOK 第2学年』明治図書出版株式会社（2011）
- ・中村光伸・清野祐介「『知の構造』を意識した『逆向き設計』論による単元構想—小学校国語科における説明的文章教材の単元構想を通して—」（2017）
- ・文部科学省『中学校学習指導要領解説 国語編』東洋館出版社（2008）
- ・文部科学省『評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料【中学校 国語】』（2011）
- ・文部科学省『言語活動の充実に関する指導事例集【中学校版】』（2012）